

一人一人を生かす生活科・総合活動の進め方

山口大学教育学部附属光小学校

はじめに

平成時代の幕開けとともに、新学習指導要領が告示された。そこでは、情報化、国際化、価値観の多様化、核家族化、高齢化など社会の急激な変化に自ら対応でき、調和のとれた人間性の育成が求められている。

つまり、これからの教育の対応として、人間尊重の理念をふまえ、個性と能力を伸長し、心豊かで、国際感覚を持つたくましい子供を育てることが大切である。そして、また一方では、学校と地域と家庭が有機的な連携のもとに、生涯にわたって自己教育力を啓発するように、その基盤づくりが重要になってくるのである。

したがって、これからの教育の対応のし方を考えた時、われわれ教師には、これまでの教育課程の編成、教育内容、教育方法を見直し、自立の基礎を育て、調和のとれた子供の育成という立場からの改善が必要になってくる。そこでは、当然われわれが陥りがちであった文化的価値を教授し、記憶させるという教師主導型の教育にメスを入れなければならない。そして、真に子供自身が、自己を見つめ、自己に働きかけ、自己を高める教育でなければならないであろう。

そこで、われわれは、新教育課程から登場する生活科と本校が独自に編成している総合活動を通して、これからの小学校教育のあり方を考えてみたい。

第1章 一人一人が生きる生活科の学習

～一人一人の自立をめざして～

小学校における今回の改定の目玉は、1・2年の社会科と理科が廃止され、生活科が設定されたことである。この章では、生活科の必要性、ねらい、性格を明らかにし、そのねらいにそった単元の構成のし方と実践の一端を述べよう。

1 生活科の必要性

(1) 具体的な活動や体験を通して学ぶ大切さ

幼稚園年長児童と小学校低学年は、心身発達の面で共通性が多いといわれる。スイスの心理学者ピアジェは、子供たちの成長の過程に見られる発達段階を、「前操作的思考」の段階（4～8才）→「具体的操作」の段階（8～11才）→「形式的操作」の段階（11～12才）の三つに区分している。低学年の子供にとっては、前操作的思考から具体的操作の時期に当たり、体全体を使って「見る」「調べる」「表現する」「育てる」「遊ぶ」などの具体的な活動や体験を通すことが、本物の学

習になることを指しているのではないだろうか。

ある新聞投稿欄に、小学校2年生の女の子が、秋口にどこからともなく漂ってくる「キンモクセイの花」の高貴な香りに接したとき思わず「まあ、いい匂い、トイレの匂い！」とつぶやいたことが書かれていた。この子供は、本物のキンモクセイの匂いをかいても、本物の美しいキンモクセイの花をイメージできない。何が事実かを的確に判断できないばかりか、その花の持っている独特の美しさにも感動できないのである。これは、キンモクセイに直接ふれるという体験が不足していたからであろう。

今述べたことは、特殊な例であろうか。身近にいる子供たちからもこれと似た例が思い浮かぶであろう。子供たちは、代理体験によって学習し、本物を知らずに「知っている」「わかっている」「できる」と思い込んでいることが多いのではなかろうか。

これは、学校での授業が、学習の効率化の名のもとに、教科書を中心に系統的な学習内容の定着に傾斜をかけすぎていることにも原因がある。そこでは、多くの時間や労力を必要とする体験的な学習は敬遠され、座学による教師主導型の授業に陥っている。そして、とりわけ低学年の児童にとって、体全体を通さない学習は、本物にふれるようになった喜び、自分が全力を出し切ることができるようになった自信を持つ体験を少なくしている。

児童の成長発達の段階から考えて、具体的な活動や体験を通して学ぶことは低学年に必要である。もっと、野山にでかけて草花を見付けたり、集めたりして、自然の美しさ、すばらしさにとけこむ体験、友達と一緒に楽しく遊びをつくりあげる体験などのできる教科が求められる。

(2) 総合的に学ぶ大切さ

幼稚園での園児の活動は、実に自由で生き生きとしている。かといって、幼稚園教育が教師の働きかけなしに、無目的、無意図的に実践されているわけではない。

健康、人間関係、環境、言葉、表現という領域に基づいて実践がなされているわけであるが、ここでは「遊び」を核にして5つの領域が調和よく行われている。実に、園児の発達の要求に応じ、生活経験に即した総合的な指導がなされていることを実感するのである。

しかし、総合的に指導されてきた園児たちは、小学校に入学すると、すぐに教科主義の立場から教育されることが多い。もちろん、基礎・基本の徹底が叫ばれている昨今、国語科や算数科において、3RSといわれる「読むこと」「書くこと」「計算すること」は、大切にされなければならない。それにしても、幼稚園教育と小学校低学年教育の学習の仕方には、なんと大きな違いがあるのだろうか。

幼小教育のつなぎにあたる低学年の段階において、幼稚園教育の良さを取り入れて、幼稚園と小学校の教育の連携をスムーズにする必要がある。

そこで、社会科、理科を中心に合科的な指導によって総合的に指導することが奨励された。この方法は、単元の構成のしかた、指導方法のむずかしさから実践が進まないのが現状であるが、大きな教育効果がある。子供の立場から教育を見直したとき、低学年の発達段階にあった総合的に学ぶ教科が求められる。

2 生活科のねらいと性格

(1) 生活科のねらい

教育課程審議会の答申の中で、生活科のねらいについて次のように記されている。

具体的な体験や活動を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立の基礎を養う。

このことから、生活科は、何かを教えるのではなく、生活自立者として自立の基礎を育てるものであることが分かる。しかしながら、自立の基礎を育てることは、生活科のみで達成されるものではなく、各教科、道徳、特別活動などすべての領域を通して総合的に指向していくものであろう。また、低学年だけにかかわることでもない。そこで、生活科では、自立の基礎を育てるために次のポイントが洗い出されているのである。

子供の具体的な活動を通して

- ① 自分と身近な社会とのかかわりに関心を持たせること
- ② 自分と身近な自然とのかかわりに関心を持たせること
- ③ 自分自身や自分の生活について考えさせること
- ④ 生活上必要な習慣や技能、態度を身につけさせること

(2) 生活科の性格

ア 自分が社会や自然とかわる

社会、自然を対象とする学習は、社会科で社会認識を育て、理科で自然認識を育てるという立場からなされてきている。ここでは、事実と事実、現象と現象との関係をとらえることに重点がおかれる。

しかし、生活科においては、社会と自分の相互依存、自然と自分の相互依存に気づくことが大切である。そして、自分の社会や自然に対する役割が分かり、行動に移せることが求められるのである。

例えば、社会とのかかわりという立場から、「うちのかぞくはがんばりやさん」といった単元で学習する場合、子供たちが母親や父親の仕事の内容を客観的に多く知ることよりも、それらの仕事に支えられている自分自身が分かり、家族に対して感謝の気持ちをもてることが大切である。そして、家庭の一員としての役割に気付き、お手伝いというような具体的な行動に移せることが重要になるであろう。さらに、子供がしようと思ったことがうまくいかなかった場合、その失敗をバネにして、自分なりに解決していこうとする体験が重視されるのである。

また、「上手な買い物をしよう」という単元で、身近な店を教材として学習する場合も同様なことが言える。

第三者の立場から、商品の並び方、値札のつけ方など、店の工夫に気付くことよりも、消費者として、どのような買い物のしかたをするのがよいのかが分かり、店の人と適切に接していけるようになることが重要である。

一方、自然とのかかわりという立場から「生きものなかよし」という単元で植物を育てる場合は、どうであろうか。

この場合も葉がどのように出てくるのか、花びらは何枚あるのかという知識を習得する以上に、美しい花を咲かせたい、大きな花を咲かせたいという願いを大切にしながら、なんとか植物を枯らさないように工夫する体験を重視したい。

このような立場から、植物を育ててみる体験が、植物の生長過程を自己の生活過程と一体化した分かり方に至らせ、植物を大切にしようとする行動へとかりたてるのである。

イ 自分自身について考える

生活科は、自分について学習するという性格を持っている。小学校低学年であるので、大人に求めるような自己概念を築くというレベルのものではない。先にも少しふれているが、自分について考えるとは、次の2点からとらえるとよいだろう。

- ① 自分のよさやそのよさを生かす方法が分かること。
- ② 自分のよさを支えてくれる周りの人々のことが分かること。

自分のよさやできるようになったことは、子供たちが具体的な活動や体験を通して、身近な環境にかかわっていくことによって実感的にとらえていくものであろう。

例えば、美しい花を育てることができた体験は、美しい花に感動するだけでなく、その花を育て上げたことの自信や喜びに通じる。そして、それらのことが自分のよさが分かることになるのである。

しかし、自分のよさを伸ばすことは、子供だけの力では不可能である。周りの人々の支えが必要である。したがって、周りの人々の温かさを実感させることが、周りの人々に感謝の気持ちを持たせるとともに、子供自身のよさをさらに伸ばすことにもなる。

ウ 生活上必要な習慣や技能、態度

子供に自分のよさやそのよさを生かす方法を分からせることは、自立をうながすであろう。しかし、生活科では、分かる段階からできるようになる段階まで高める必要がある。そこで、日常生活や学習などに必要な基本的な習慣や技能、態度を身につけさせることが大切になってくる。

例えば、基本的な生活習慣として、身なりを整えること、安全のきまりを守ること、身のまわりの人々へのあいさつ、家庭や学校あるいは近所での行動のしかたなど、社会の規範や自己をコントロールする方法を身につけさせることが大切である。

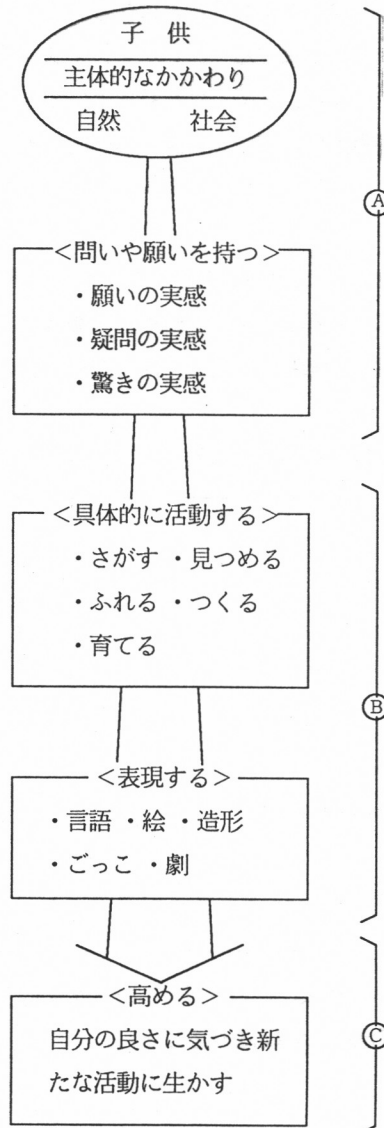
また、生活技能として物を扱うときに必要な「持つ・にぎる・運ぶ・包むなど」の技能を培うことを重視したい。

さらに、学習にかかわる基本的な態度として、身構え（姿勢・身じたく・集合のしかたなど）物構え（学習用具の準備）心構え（目的意識・期待感・集中力など）が他の教科以上に大切になってくる。

しかし、これらの習慣や技能、態度はおしつけられて身に付くものではない。子供たちが、社会や自然に働きかける具体的な活動や体験の過程で身に付けていくものである。

エ 自立の基礎を養う授業の設計

生活科の授業は、子供や地域の実態に応じた具体的な活動や体験の場が十分に保障された展開が期待される。しかも、自立の基礎を養うという立場から授業設計されなければならない。そこで、わたしたちは、次のように試行していく。



Aの活動は、身の回りの事物、事象に主体的にかかわり、「すごいなあ、自分もやってみたいなあ。」「どうすればよいのだろう。」というような出会いを生起させ、活動のエネルギーとなる問いや願いを持たせるものである。したがって、子供たちに感動的な出会いが起こるような対象を意図的・計画的に準備することが大切になってくる。

Bの活動は、自分の願いを実現したり問いを解決したりするために、主体的に観察したり、ふれたり、作ったりすることである。そして、その結果を自分のもっとも得意な方法で表現していくことである。

したがって、子供たちが十分に活動したり、表現したりできる場と時間を保障してやることが大切になる。この段階において、子供たちは、社会や自然とのかかわりから自分自身の気付きを持つ。

Cの活動は、自分のよさを生かして、自分の生活を高めたり、自分らしい学習を作り上げたりしたことに喜びや充実感を体全体で味わうことになる。この段階において、自分のよさについてますます自信を深めていくことになる。しかし、生活科の授業の定型はないので、教師の創意工夫が望まれているのである。さて、生活科について述べてきたが、実際には、どのような単元構成、指導計画、実践を進めるのか、次に具体的姿で示してみたい。

3 単元構成の要件

単元構成にあたっては、いくつかの要件を掲げ、それにかなうような単元を設けている。つまり、内容の視点の適切性、指導要領の目標との合致、幼稚園の領域からの系統性、地域の特性を生かした独自性、活動・体験の豊かさ、他教科・道徳・特活の関連などの要件を考えて単元を設けたのである。

- 生活科の内容の10の視点中から選んで単元をつくること

<ul style="list-style-type: none"> 1 健康で安全な生活 2 身近な人々との接し方 3 公共物の利用 4 生活と消費 5 情報の伝達 6 身近な自然との触れ合い 7 季節の変化と生活との関わり 8 物の製作 9 自分の成長 	<p>10</p> <p>基本的な生活習慣や生活技能</p>
---	--------------------------------

* 生活上必要な習慣や技能は、社会、自然、自分自身にかかわる学習活動の展開に即して行う。

- 指導要領の目標・内容と合致した単元を作ること

<指導要領の目標>

- (1) 自分と学校、家庭、社会、近所などの人々および公共物との関わりに関心を持ち、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、適切に行動することができるようにする。
- (2) 自分と身近な動物などの自然との関わりに関心を持ち、自然を大切にしたり、自分たちの遊びや生活を工夫したりすることができるようにする。
- (3) 身近な社会を観察したり、動植物を育てたり、遊びや生活に使う物を作ったりなどして活動の楽しさを味わい、それを言葉、動作、劇化などにより表現できるようにする。

○ 幼稚園での学習内容と関連する単元を作ること

<幼稚園教育要領、領域>

- ・ 健康 健康な心と身体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す
- ・ 人間関係 他の人々と親しみ支えあって生活するために、自立心を育て人と関わる力を養う。
- ・ 環境 自然や社会の事象などの身近な環境に積極的にいかかわる力を育て、生活に取り入れていこうとする態度を養う。
- ・ 言葉 経験したことや考えたことなどを話し言葉を使って表現し、相手の話す言葉を聞くこととする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚を養う。
- ・ 表現 豊かな感性を育て、感じたことや考えたことを表現する意欲を養い、創造性を豊かにする。

○ 自己の自然や社会を生かし、それを一体的に扱う単元を作ること

付属光小学校の自然環境

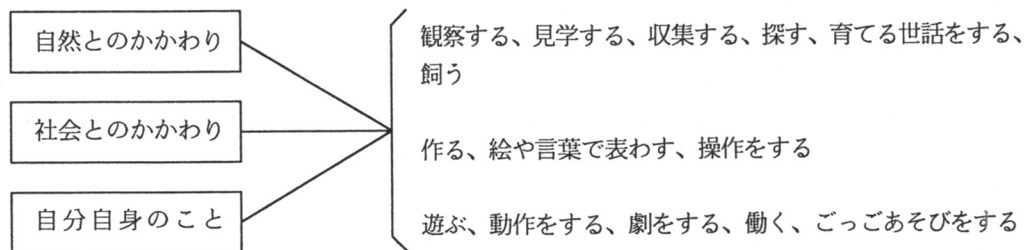
本校は、光市室積南端のが眉山に抱かれ、御手洗湾を望む自然美の中に置かれている。周南工業地域に含まれながらも、周囲は瀬戸内海国立公園に属しており、澄み切った空と清らかな海、鮮やかな緑に恵まれ、まれにみる景勝の地である。

付属光小学校の生活環境

本校は、光市の南端にあるため、児童の約半数はバス通学者である。また電車通学者もあり、公共の交通機関の利用度合いが高い。途中には商店、バス停、寺、銀行などがあり、公共施設も近くにある。

○ 具体的な活動・体験が豊かで適切である単元を作ること。

<具体的な活動・体験>



以上のような単元構成のほかに他教科・道徳・特別活動などと合科的指導を考慮して単元をつくる
ことが望まれる。

単元「がび山大好き」(1年)

1. 目 標

- (1) がび山・象鼻が岬にある公共施設は、みんなのものであることが分かり、それを大切に利用することができるようにする。
- (2) 春、夏から秋にかけて、季節によって自然の様子が変わることに基づき、それに合わせて生活できるようにする。
- (3) 木の葉や木の実を使って遊びに使うものを作ったり、みんなで遊びを工夫したりすることができるようにする。

2. 指導の立場

本単元は、がび山、象鼻が岬という山と海に囲まれた自然公園を活用して設定している。

がび山は、陸繋島として室積半島に連なり、自生の常緑暖帯性樹林などが繁っている。また、自然研究路やさまざまな公共物も整備されており、子供たちの野外での活用に適した場所であると言える。

子供たちは、がび山に行くことが大好きである。しかし、そこでは、ただ何となく見たり遊んだりする姿が見られ、自然を生かして作ったり表現したりするような遊びを工夫することはできない。また、公共の施設や自然を利用させてもらうといった意識も薄い。

そこで、指導にあたっては、次の点に留意したい。

- 「基地作り」「どんぐりごま大会」など、自然の草木や土・砂などを十分に使った遊びを体験させる。
- 公共施設を利用した遊びをさせた後、「かたづけタイム」をもうけ、正しい利用のし方が習慣づくようにする。
- 春・夏に遊んだことを書き残させ、秋の遊びと比べさせることによって、季節の変化に気付かせる。

3. 指導の展開（約15時間）

主な学習活動	教師のはたらきかけ
<p>第一次 がび山たんけん ⑦</p> <p>○象鼻が岬に行って遊ぶ 基地作り、松の葉ずもう、じんとり、虫さがしなど (春や夏の遊び)</p> <p>○みたことや遊んだことを絵や文に表し、絵地図づくりをする</p> <p>○公園での遊び方のきまりをつくる</p>	<p>④ 学校のまわりの写真</p> <p>○がび山・象鼻が岬に行くときには、交通のきまりを守らせる</p> <p>○いろいろな施設にかかわりを持てるような遊びをさせる</p> <p>○絵地図(床地図)を用意し、その上を歩いたり、絵をはり付けたりする</p>
<p>第二次 楽しいがび山の遊び ⑧</p> <p>○秋の公園で落ち葉や木の実を集める</p> <p>○落ち葉や木の実を使ってできる遊びをする (どんぐりごま、落ち葉の衣装づくり、おめん作りなど)</p> <p>○作ったものの発表会をする</p> <p>○春、夏と秋の様子の変化を遊びの変化で比べる</p>	<p>⑤ 木の葉で作ったお面、どんぐりごま、やじろべえなど</p> <p>○作ったものを使って「どんぐりごま大会」「きれいな衣装大会」などをさせる</p> <p>○生活班で活動させることによって教え合ったりできるようにする</p> <p>○「がび山の遊び方じまん」をさせる</p> <p>○動植物の変化、衣服の変化、気温の変化など、さまざまな変化で季節の変化をとらえさせる</p>

4. 本時案例－第一次・5時分－

(1) 主 眼

象鼻が岬のたんけんで楽しかったことを絵地図に表すことによって、もっと遊んでみたいことを見つけることができる。

(2) 準 備

VTR、絵地図

(3) 学習の展開

学習活動・内容	教師のはたらきかけ
1. 公園を利用したときのことを話し合う 自然の中で ・見たこと ・集めたこと ・さわったこと ・作ったこと	㊟ VTR 公園で遊んでいる様子 T. 遊んでいるとき楽しかったことは、どのようなことでしょう ㊦ 校庭や低学年広場で遊んだことと比べさせる
2. 遊びに使ったものや見つけた物を描き、絵地図づくりをする ・見つけた動植物 ・施設・設備 (ベンチ、水道、休憩所)	T. 公園で遊んだ様子を絵に描き表してみよう ㊦ 床地図を作り、その上を歩いたり施設や動植物の絵をはりつけさせる
3. 公園の中でした楽しい遊びを教え合う ・してみたい遊び ・作ってみたい遊び	T. これから、どんな遊びをしてみたいか ㊦ 自分のした遊びとは違う遊びの話聞かせる

5. 授業の実際

(1) 多様な遊びをさせ、がび山、象鼻が岬の魅力にふれさせる

子供たちには、がび山・象鼻が岬の恵まれた自然の中で、じんとりやかくれんぼをして遊ばせる。また、松の葉や落ち葉、小石などにも目を向けさせ、「松の葉ずもう」などをして遊ばせる。そうした中でしだいに、公園での楽しい気分や爽快さを味わわせることができるのである。これらのことは、子供たちに、自然と一体となって生活する喜びを感得させることとなり、さらに遊びを発展させていく材料を発見させることになる。たっぷりと遊びを体験させておくことは、絵や文による自己表現をより容易にし、自他の良さを認め合うことにもつながっていくのである。

(2) 友達と協力したり教え合ったりして木の葉や木の実を使って遊ぶ

秋には、しいの実やかしの実が落ち、どんぐりごまなどを作るのによい材料となる。また、様々な色づいた葉は、美しい飾り作りの材料となる。これらを使って遊びを工夫させるには、一人で作ったり操作したりする遊びより、友だちといっしょの遊びの場を設定する方がよい。子供たちは、班での活動の中で協力したり自分の考えを出し合ったりできるのであり、より工夫された遊

びが創り出されるようになるのである。

(3) 単元を通して自然との触れあい方を学ばせる

がび山は自然公園であり、自然保護の立場から守るべききまりがある。むやみに草木や小動物を採取しないこと、遊びの後始末を必ずすることなどを習慣化させていくことが大切である。このような活動は、自然利用と自然保護を調和させていくこととなる。

第Ⅱ章 一人一人の子供が生きる総合活動

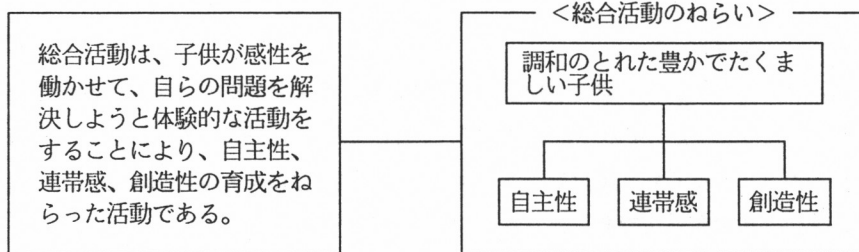
－自主・連帯・創造をめざして－

平成元年3月に「小学校学習指導要領」が告示され、「児童の人間として調和のとれた育成」をめざして教育課程を編成することが強調されている。そして、指導にあたっては、「体験的な活動を重視するとともに、児童の興味や関心を生かし、自主的、自発的な学習が促されるよう工夫すること」として、ますます、体験的な活動を重視した「総合活動」が必要になってきた。

そこで、ここでは、始めに、総合活動とは何か、調和のとれた人間の育成と体験的な活動とはどのようにかかわっているのかを述べ、次に総合活動の必要性を、最後に、本校が実践している総合活動の姿や単元構成および展開のし方を述べてみたい。

1. 自主・連帯・創造をめざす総合活動

調和のとれた、豊かでたくましい子供を育成するためには、学校で繰り広げられる教育活動の中に「総合活動」を位置づけることが大切になってきている。本校では、この「総合活動」を次のようにとらえている。



言い換えれば、自主性・連帯感、創造性の三つを核にして、多様な体験的な活動を構成したものを総合活動としているのである。つまり、さまざまな教科、領域の学習やこれまでの日常生活で身につけてきたすべての力（基礎的な能力や態度、学習の仕方など）を取り込んで、目標や内容を別の視点で総合的に構成し直した活動（学習）とすることができる。ここが、いわゆる合科的指導や関連的指導と大きく異なるところと言える。

2. 総合活動の必要性

21世紀を生きる子供たちにとって、今一番不足しているのは直接体験、感動体験である。学校においても、これらの生の体験をふまえて、判断し行動していく機会が少ない。特に、創造性が大切であると言われてから久しいが、創造性は五感を通した多くの体験的な活動によってはぐくまれるものであり、教科学習だけでは限界がある。つまり、教科書に依存しすぎたり、細切れの知識だけを優先したりしては、子供たちは本物体験をすることができず、生きる力として定着しないのである。

また、「他人へのかかわりが非常に貧しい」「分業はできるが協業ができない」「群れていなければ自分一人では行動できない」などと指摘されている。集団の中で行動する場合は多いが、真に相手の立場を思いやり連帯することや、自主的主体的に取り組むことの弱さが目立つのである。

こうした中で、本校では、昭和54年から「C・Sタイム」（現在では「潮騒の時間」）を実施してきた。

C・Sタイムには、すでに総合活動の理念を見ることができる。すなわち、そこでは子供たちの創造（Creation）と連帯（Solidarity）、それに自主（Independence）をめざして、多様な活動を構成してきた。例えば、学級や学年、あるいは、全学年での創作活動、自然・地域の観察活動などであり、それらは現在の総合活動や潮騒の時間にも引き継がれている。

このように、不足しがちな直接体験を補い、調和のとれた豊かでたくましい子供を育てるためには、教科や学級の枠を越えて実践される総合的で体験的な活動の場が不可欠となってくる。その中で、一人一人が願いや意欲を持ち、感動が味わえるような出合いをさせてやりたい。その結果、子供たちの総合的に判断し行動する力を育てることができると共に、集団における自己や人間関係を磨き合う過程で、本校がねらっている「自主性・連帯感・創造性」を高めていくことができるのである。

3. 本校の総合活動のすがた

(1) 総合活動が展開される場

それでは、どのような活動を総合活動としているのか、その基本的な考え方を紹介しよう。

子供たちは、教科学習をすすめていくなかで、さまざまなものに興味・関心を持つ。それが、その単元にかかわりがあっても、授業では覆い尽くせない発展性のある問いになることがある。第一の場は、教科学習の発展化である。

例えば、単元「手作り楽器による音楽会をしよう」では、子供たちが理科で音の学習をしてみると、音の出るしくみや音色に興味を示し、自分で楽器を作ってみたいという願いを出してくる。この願いは、理科や音楽の時間だけでは実現させてやれない場合が多い。

次に、生活の中から生まれた、子供にとっても必要感のある切実な課題が総合活動になることもある。それらのあるテーマをもとに結合させたり関連させたりして、子供自らが主体的で息の長い追究ができるような活動の場を仕組むことが考えられる。これが、第二の場である。

第三の場は、特別活動や学年の枠を越えたところでの活動の総合化である。本校では、学級や

学年の枠を越えた異年令の生活集団の組織（ファミリー・班）をつくっている。この集団は、一年生から六年生までを縦割りに編成したもので、この集団によるさまざまな活動を「青雲活動」と呼び、みんなで楽しく学び合える活動にしている。

この種の総合活動の例として、「ファミリーでふれ合う青雲ハイキング」がある。本校は、国立公園である峨嵋山と瀬戸内海・御手洗湾とに囲まれており、恵まれた環境の中で生活している子供たちは、議題ポストに投函されていた「友達やファミリーのみんなとハイキングをしたい」という意見について、代表委員会で話し合い、この総合活動を生む契機となった。この活動は、集団の中の自己や人間関係のあり方をお互いに磨き合えるものになる。

以上のことをもとに、本校の総合活動のタイプを三つに類型化すると、次のようにまとめられる。

- 教科・道徳の学習の発展。複数の教科の学習内容を統合する型
- 子供の日常生活の中から生まれた切実な課題を追究する型
- 学級や学年の枠を越え、特別活動や創意の時間を中心に活動する型

このような場を設定して総合活動を展開すれば、子供一人一人の願いや意欲に基づいた問いを追究したり、自己や人間関係のあり方を磨き合ったりするのをあたたかく見守ってやることができる。そして、子供を本来の姿にもどし、伸び伸びと人間らしく活動させることによって、自信や満足感を味わわせることができる。その意味では、総合活動は子供一人一人が生き、夢を持ち、主人公になれる場であるということができる。

(2) 総合活動がめざす子供像

昭和62年度に、青雲活動「旗たおし+綱引大会をしよう」を実施した。その青雲グループのリーダーであり、代表委員でもあったある6年生が書いた作文を紹介し、総合活動でめざす子供像をクローズアップしてみたい。

ぼくたちのファミリーは、三位というおいしい成績に終わった。だが、ぼくはそれで十分うれしかった。それは、新しい発見・体験をしたからだ。どんな発見・体験かと言うと、綱引きをしているときのみんなの一生懸命な顔、勝ったあとのうれしそうな顔、喜び、みんなの連帯感などだ。ぼくは、ファミリーのリーダーをやって、このとき程の喜び、一生懸命さ・まとまりを見たのは始めてだった。…(中略)…ぼくは、これからは、みんなのよいところを伸ばしてやれるようにしたい。

今回の青雲活動は、ぼくたちが作った旗を使いながら、ファミリーのまとまりを強めるためにはどうすればよいのかという議題があったが、みごとにやりとげることができたと思う。これからも、みんなが力を合わせてできるような場をどんどん作ってみたい。

この活動を企画する立場の一人の子供の作文だけで、全てを解釈することはできない。しかし、この作文の中に、総合活動がめざしている子供の姿は十分に読み取れる。

「みんなのよいところを伸ばしてやれるように」「場をどんどん作ってみたい」という自主性。対象となる環境や人間などにすすんで働きかけることによって、粘り強く追究し、体験的に自らの課題を解決しようとする態度が身につく……………《自主性のある子供》

この6年生が発見した「連帯感」や「まとまり」。仲間と協同して活動することによって、力を合わせ、励まし合ったり認め合ったりすることができる。また、自分が集団のために役立っていることを自覚できる……………《連帯感のある子供》

ファミリーの願いや連帯の象徴としての旗の創作。旗を使った新しい青雲種目の創造。子供が創造活動をすることによって、自分にしかできないことをやり遂げたという成就感を味わうことができる……………《創造性のある子供》

以上、総合活動の一例をもとに、その作文から、具体的な子供像を示してみた。それらをまとめると、次のようになる。

— <総合活動がめざす子供像> —

- ① 対象となる環境や人間などに関心を持ち、目的意識を持って、自らがすすんで働きかけようと努力する自主性のある子供
- ② 人や集団とのかかわりにおいて、相手の立場を尊重しながら、協力し合って集団のために役立つとうとする連帯感のある子供
- ③ 創造活動を活発に行い、豊かな感性や直観的創造を働かせて、新しい価値あるものを生み出そうとする創造性のある子供

4. 単元構成と構成上の留意点

(1) 総合活動の対象と単元構成の視点

総合活動が対象にしている事象は、次の三つに類別される。

ア. 地域社会や自然環境

単元「青雲ハイキング」「自然教室」等

イ. 文化の創造や交流

単元「音楽劇をつくろう」等

ウ. 集団の中の自己と人間関係

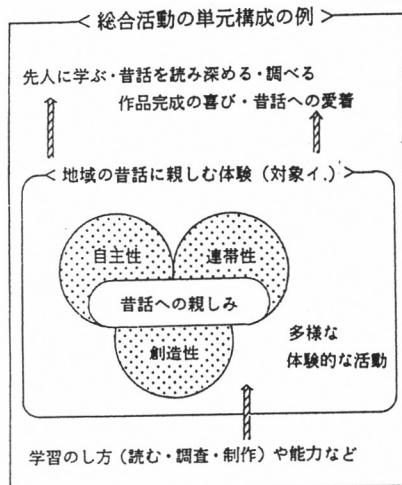
単元「広げよう、国際親善の輪を」等

本校では、これらにかかわるテーマをもったものを単元に構成している。

3年生で国語科を中心にしながら、社会科や特別活動を取り込んで実践した「地いきの昔話に親しもう」を例にして、単元構成について考えてみよう。

ここでは、既得の学習のし方や能力を生かして、自主、連帯、創造を核にした体験的な活動を

させるが、それらの内容は、どれも、「昔話への親しみ」というテーマにかかわっている。例えば、昔話を読み深める活動、昔話にまつわる史跡を調べる活動、絵本などの作品にまとめる活動である。



この一連の体験的な活動によって、自主性や連帯感や創造性を高め、喜びや愛着、満足感を感じ得させられるように、単元を構成している。

以上、「地いきの昔話に親しもう」の単元を例に、単元構成における視点を述べたが、まとめると、次のようになる。

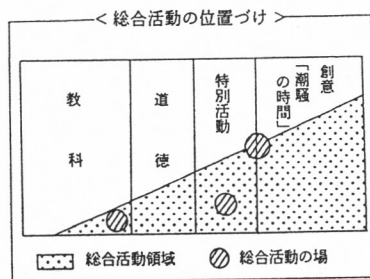
- 子供が興味関心を持てる対象で、主体的連続的に追究していけること
- 深みと広がりを持った多様な体験的な活動が構成できること
- さまざまな集団の友だちといっしょに活動(学習)できること

このようにして開発した単元は、各学年2～3事例あり、全校的にも数事例ある。

(2) 総合活動と教科・道徳・特別活動とのかかわり

ア. 各教科

教科学習から発展した問題や複数の教科の学習内容を統合させて、一つの単元を構成する場合、各教科と密接な関係がある。教科学習では、分析的な見方、考え方をすることが多いが、総合活動では、多面的・関係的な、つまり、総合的な見方・考え方・行い方ができることをねらっている。すなわち、教科学習との相互補完の中で、既得の学習のし方や能力を生かして、人間性豊かな子供の育成に資するものであるととらえられる。



イ. 生活科

生活科は、「具体的な活動や体験を通して、身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち・中略・自立への基礎を養う」教科である。言い換えれば、自立をめざした総合的な教科とも考えられ、関連が非常に大きい。

そこで、本校では、各単元ごとの指導の立場の中に生活科における内容の10項目とのかかわりを示した。

ウ. 道徳・特別活動

総合活動の三つのねらいである自主・連帯・創造にかかわる道徳性を育てたり、総合的な発表会をするために学級活動を行ったりすることで、道徳の時間や特別活動とのかかわりが大きい。特に、体験したことや価値を深め組織化する上で、これらの時間を単元の中に取り込むことが重要になってくる。

(3) 時間の確保

総合活動は、統合関連する各教科・道徳・特別活動の領域から時間を確保して実施している。一人一人の追究の場は「潮騒の時間」などを充てている。このため、3年で58時間、4年で55時間、5年で62時間、6年で52時間となったが、子供の実態や指導者の意図により、その運用は柔軟にしたいものである。

5. 総合活動の基本的な指導過程と評価

(1) 総合活動の基本的な指導過程

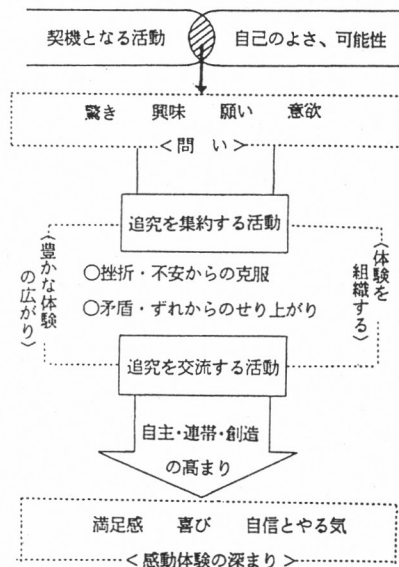
総合活動では、子供たちの具体的で体験的な活動・感動的な出会いの場が十分に保障されなければならない。

そこで、本校では、下図のような総合活動における基本的な指導過程を考え、模索している。

この過程では、子供一人一人の問いをもとに、自己のよさや可能性を生かして活動を展開することを大切にしている。そして、それぞれの体験的な活動をするなかで、自主性や連帯感や創造性の高まりをねらっている。

これらの高まりは、挫折や矛盾と対決している自分に気づき、そこから克服や友だちとのせり上りによって可能になる。その際、他教科の学習内容を統合した豊かな体験の広がりをめざし、教師の手によって体験の組織化をすることが大切である。しかし、指導には定型はなく、教師の創造性にゆだねられる。

こうして、満足感や自信にあふれたより高まった自分の生き方（人や社会、自然とのかかわりかた）を学んでいくのである。



(2) 総合活動の評価

総合活動は、ただ体験をさせればよいというものではない。ねらいがあるからには、それに見合った評価をすべきであると考えている。

本校では、下の表のように、自主・連帯・創造のねらいに沿って、学年発達も考慮に入れて、各単元ごとに評価している。

	自主性	連帯感	創造性
低学年	○喜んで活動に参加したか	○活動のきまりを守って、仲良く楽しく活動したか	○自分なりのやり方を工夫したか
中学年	○自分なりの問いや願いを出し、人に頼らず活動したか	○自分に持ち味を生かし、協力し合って活動したか	○今までにない新しいやり方を工夫したか
高学年	○自分なりの問いや願いをもとに計画し、活動したか	○相手の立場を思いやり互いに高め合おうと活動したか	○新しい考え方や方法を取り入れ、活動を豊かにしたか

これは、評価の大綱であり、評価の場や方法も単元によって一様ではない。また、活動中の自己評価や教師の観察記録も含めて、評価を工夫している。

ところで、情意的な面の評価だけで、認知面は評価しないのだろうか。

総合活動が各教科の学習内容を持ち寄り、それを統合している場合、教科の目標や内容の一翼を担っていることになる。その意味では、確かに認知面も評価の対象となり得るものである。それどころか、体験することによって、はかり知れない生きて働く深い知識を獲得していると言てよい。

しかし、体験的な活動は個性的なものであると言われている。これまでの教科学習が評価してきたように、どの子供にも一律にどこまでできたかを求めるのは無理である。また、体験を目標としている以上、内容の理解のみを単独に評価に取り上げることも難しい。

そこで、内容を包み込んだ情意的なねらいを、自主性、連帯感、創造性の三つの柱で評価することにしたのである。つまり、活動に対する態度や意欲、挫折や矛盾からの克服やせり上がりの過程を評価したいのである。

単元「広げよう、国際親善の輪を！」(5年)

1. 活動のねらい

- (1) 日本のすばらしさに誇りを持ち、日本らしさを生かして国際交流をさせる。(創造)
- (2) 外国の人々や文化を大切にす心情をはぐくみ、世界の人々との友好に努めさせる。(連帯)
- (3) 国際理解と親善を深めるため、進んで外国の人々に接する態度を育てる。(自主)

2. 指導の立場

本単元は、5年生の社会科学習「世界をむすぶ交通・通信」において、“通信システムの急激な発達によって、世界の人々が密接につながって生活できるね。”という子供達の驚きの声を大事に生かして設定したものである。

国際化の教育については、時代の強い要請の通り、本学級の子供たちも、海外旅行したり、帰国子女であったり、家族が海外出張していたりして、外国への興味や関心度が高い。このような実態の中から、社会科学習が引き金となって、子供同志で海外の具体的な様子について実例も混じえながら、外国との通信の話し合いに熱がこもった。ちょうどそんな折に、子供たちは、全校朝会において、副校長先生より海外教育視察の御縁としてシカゴのアカデミー小学校から姉妹校の申し出があったことを耳にしたのである。

そこで、シカゴの小学校とお互いの生活を情報交換する体験を通して、国際親善の輪を広げたいという子供たちの願いを実現させることにした。

なお、生活科との関連は、主として、⑤の「情報の伝達」である。

3. 活動の展開（約10時間）

第一次 国内や世界を結ぶ交通・通信 ～社会～（3時間）

- 国内や世界を結ぶ交通網を調べる。
- 国内や世界を結ぶ通信網を調べる。（郵便や電話などの通信網）

-----〈国際交流の契機となった子供たちの問い（つぶやき）〉-----

社会科の学習をして、交通や通信網の急速な発達のおかげで日本と世界の人々との密接な関わりがよく分かったね。

地球が狭くなったみたいで、外国が身近に感じられ、世界の人々の様子をもっと知りたいな。

第二次 シカゴの小学生とお友達になろう ～特活～（2時間）

- 学級会において、「お返事を出そう」について話し合う。
- 学級の願いを全校に呼びかけるため、代表委員会に議題として提案する。
- 代表委員会において、全校的な取り組みについて話し合う。

第三次 シカゴのお友達と交流を深めよう ～特活～（2時間）

- 学校や学級紹介の内容について話し合い、手紙に書く。
- 絵や習字なども同封する
- 各学年ごとに、同封する作品を創意工夫する。

— <全校に国際親善の輪を広げよう> —

- 1年；手作りの紙ひな人形
- 2年；絵画「遊んでいるお友達」
- 3年；習字「日本」「平成元年」
- 4年；歌のカセット「日本の童謡」
- 5年；多色版画「運動する仲間」
- 6年；手紙「三学期の学校生活」

第四次 国際理解と親善 ～国語・道徳～（3時間）

- 国際交流を通じて学んだことを作文に書き、話し合う。（世界の人々との心の交流）

4. 活動の実際

- (1) 「外国の小学生とお友達になりたい」という子供たちの願いを生かす。

子供たちは、社会科学習が契機となって、世界へ目を向け始めていた矢先、シカゴから、姉妹校依頼の手紙が届き、夢が実現となったので湧きに湧いた。

日本の字で一生涯懸命書かれた気持ちが伝わって来るね。

そして、全校朝会のあった午後、学級会の時間に、早速、提案したい議題として採り上げた。以下、そのときの子供たちの思いを紹介してみたい。

- A男；通信の網は、目に見えないけど、世界中の人々の心をつなぐ重要な機能だ。ぜひ、地球の反対側の人々と通信してみたい。
- B子；家族で海外旅行したとき、日本語でお話できて、外国人の国際性の進歩に感心した。日本人も、もっと外国を理解しよう。
- C夫；外国の小学生が描いた絵を見たことがある。遊んでいる様子が楽しそうだった。日本の子供の遊びも紹介してあげたくなった。

このように、子供たちにとって、国際交流への思いは、それぞれ異なる。

そこで、一人一人の思いを実現できるように、どのような形にするかは、自分らしさを発揮して自分で選択することになった。そして、第一回目の返事の出し方について代表委員会で話し合い、学校や学級の紹介として自分たちの自慢とするよさをしっかり見つめ直していった。

さらに、日本の文化や日本人らしさを作文や習字・絵などの作品に楽しく表現していた。

- (2) 子供たちの国際感覚を養い、国際性の芽を育てる。

子供たちの夢を乗せて、第一便は、子供たちの手でポストに投函された。が、不安や戸惑いは

残った。

- ・いつ、シカゴへ届くだろうか。
- ・日本語は通じるだろうか。
- ・意味が理解できるだろうか。
- ・お返事はいつ来るだろうか。

しかし、シカゴからの第二便は、期待以上に早く届いた。子供たちにとって、外国の小学生と心が通じ合えた感激はひとしおだった。

そこで、再度、「すぐにお返事を出そう」と代表委員会において話し合った。

その結果、三学期の行事と関連させ、日本の文化や生活・学習の様子を伝えることにした。そして、子供たち自らが趣向を凝らし、多様な内容を各学年合意の上で決定したのだ。子供たちが、シカゴの小学生に日本の独特の行事や冬の生活を紹介してあげるため、各学年別の写真や説明も混じえて分かりやすく伝えようと努力している姿は、実に生き生きとしていた。

また、国語や道徳の時間においても、「国際理解と親善」の価値に迫って、海外交流を通して学んだことを作文に書き、発表し合うことで、「心の国際化」を培うことにもつながっていく。

僕はシカゴに行ったことはない。でも、今、僕は、シカゴの小学生に仲良しのお友達ができた。僕の夢が全校に広がり、みんなの心がシカゴと通い合っている。

子供たちは、世界の中に生きる日本人として、外国をも愛する心、「国際性の芽」を育てていくに違いない。

以上、小学生の異文化体験は、将来大人に成長したとき、新たに大きな喜びとなり、国際社会に生きる立派な国際人としての礎となると信じる。

おわりに

「六三制野球ばかり上手なり」これは、戦後20年代のコア・カリキュラムの経験中心の教育実践に対する強烈な風刺である。

生活科・総合活動においても、具体的な活動や体験が重視されている。しかし、これらは、子供たち一人一人の調和のとれた人間性の育成、自己教育力の基盤をつくるという立場からの豊かな体験が求められている。

つまり、子供たちのやる気が湧き上がってくるような体験、新しい価値をねばり強く追い求めるような体験、やりとげた充実した体験などが重視されているのである。

生活科、総合活動での具体的活動が単なるお祭りさわぎで終わってはいけない。

今、教師一人一人の創意工夫と力量が問われているのである。